

P-241 卵巣悪性腫瘍が疑われた結核性腹膜炎の1症例

姫路赤十字病院

太田雅博, 河原伸明, 青江尚志, 繁田浩三, 赤松信雄

結核性腹膜炎は稀な疾患であるが、不明熱・腹水貯留・腫瘍マーカーの上昇などを示し卵巣悪性腫瘍との鑑別が問題となる。今回、腹腔鏡検査にて特徴的所見を得、それにより結核性腹膜炎と診断して迅速に治療を開始し、最終的に腹水培養菌よりPCR法にて結核菌を証明し得た症例を経験した。

【症例】24才、女性。平成12年11月5日より発熱し、前医(内科)にて抗生剤投与を受けるも解熱せず。胸部X-P異常なくCA-125は1300U/mlと高値を示した。CT・MRI検査では腹水貯留像と癌性腹膜炎を思わせる腹膜肥厚像を認めたが、子宮・卵巣は正常であった。11月14日、腹水穿刺施行。腹水は淡黄色でPap(2)、リンパ球優位でありLDH 1092IU/l・ADA 119.8IU/lと上昇を認めた。腹水の抗酸菌培養法により4週間後の12月12日に陽性と判明し、更にPCR法にて結核菌DNAが証明された。11月20日、不明熱・婦人科の精査のため当科紹介となり、24日に転院。同日検査目的にて腹腔鏡施行したところ、壁側腹膜・臓側腹膜に特徴的な粟粒大の黄白色結節が多数、びまん性に認められた。結節の生検を施行したが炎症所見のみで結核の組織所見は得られなかったが、腹腔鏡所見より腹膜結核の可能性が高いと判断し12月5日よりRFP・INH・EBによる3者併用療法開始し、間もなく解熱軽快の経過をたどった。

【結語】結核性腹膜炎は特徴的所見に乏しく結核菌培養結果の判明には日数を要し早期確定診断が困難である。また画像・血液検査所見からは癌性腹膜炎と鑑別困難な場合がある。早期診断には腹腔鏡検査が有用であり、積極的に施行すべきである。

ポ
ス
タ
ー
8
日
月**P-242 卵巣摘出ラット空間学習能に対するエストロゲン、プロゲステロンの影響**

東京医歯大

田辺文子, 宮坂尚幸, 麻生武志

【目的】エストロゲンは脳に対し保護作用を持ち、アルツハイマー病の予防としても注目されている。一方プロゲステロンは、エストロゲンの子宮内膜癌発症率増加を抑制するためにホルモン補充療法に併用されているが、その脳に対する影響ははっきりしていない。エストロゲンとプロゲステロンの学習、記憶、working memoryへの影響を評価する目的で空間学習能を検討した。

【方法】雌SDラット42匹をOVX群(卵巣摘出)、E群(卵巣摘出後estrogen pellet皮下移植)、P群(卵巣摘出後progesterone pellet皮下移植)、EP群(卵巣摘出後estrogen pellet, progesterone pellet皮下移植)、control群の5群にわけた。各ラットに4方向に餌を置いた8方向放射状迷路学習を行い、学習終了後にscopolamineを腹腔内投与し、15分後に再度学習実験を行った。空間学習能をcorrect choice(餌の有る通路に入る選択)、working error(既に餌を食べた通路に再度入る選択)、reference error(餌のない通路に入る選択)について5群間で比較検討した。

【成績】OVX群ではcontrol群に比して学習段階でcorrect choiceは低く、reference errorが多かった。P群も同様に学習能が低かった。scopolamine投与後ではOVX群は他群に比してworking errorが増加した。OVX以外の群では有為差を認めなかった。

【結論】エストロゲンは学習、記憶に関して脳保護作用を持ち、特にスコポラミンの神経障害に対して保護作用を有するが、プロゲステロンもスコポラミンの神経障害に対して保護作用を示した。

P-243 精神症状を伴う更年期女性に対するエストロゲン補充療法とSSRIの併用療法に関する臨床的検討九州大¹, 同精神科²永田英明¹, 野崎雅裕¹, 中野仁雄¹, 吉田敬子²

【目的】うつ病の罹患率は、女性が多く、その発症はエストロゲンの低下する出産後や閉経期に特に増加する。また、うつ病発症に脳内セロトニン濃度の低下が深く関係している。当科更年期外来において、動悸、めまいなどの身体症状を伴う不安症状に加え、全身倦怠感、睡眠障害、抑うつ気分などのうつ症状を主訴とする受診者は多い。このような精神症状を有する更年期女性においてはエストロゲン補充療法(ERT)のみで奏効しない者も認められることから、選択的セロトニン再取り込み阻害薬(SSRI)を併用し、その有用性について検討した。

【方法】問診、更年期指数によりうつ症状および不安症状を認め、抑うつ尺度としてのSDS, SRQ-Dおよび不安尺度としてのSTAI-1, STAI-2において区分点以上を認めた42名を対象とした。42名をERT単独群(A群:n=21, 年齢48.8±7.9歳)およびERT+SSRI(Fluvoxamine 50mg/day)併用群(B群:n=21, 年齢48.0±6.9歳)の2群に分類し、SDS, SRQ-D, STAI-1, STAI-2の治療前値、治療8週間における改善率をMcNemar検定を用い評価をおこないp<0.05を有意な改善とした。

【成績】A群では、いずれにおいても有意な改善は認めなかった。B群においては、SDSの改善率検定p=0.015, SRQ-D:p=0.008, STAI-1:p=0.2188, STAI-2:p=0.016とSTAI-1以外は有意な改善を認めた。

【結論】精神症状を有する更年期女性に対して、エストロゲン補充療法とSSRIの併用療法は有効であると考えられた。